

「地域コミュニティと地域組織を元気にする六箇条」

立命館大学産業社会学部 教授 乾 亨

近年、地域活動と縁遠かったマンション住民や若い子育て世代も含め多くの人たちが「地域コミュニティ」の大切さに気づき始めています。しかしその一方で、コミュニティを支える仕組みである町内会や各種団体、自治連合会などの地域組織は、参加率の低下やリーダー層の高齢化という問題を抱えています。地域コミュニティが大切なものだとなれば、それを支える仕組み(地域組織)の弱体化をなんとかしなければなりません。ここでは、そのためのヒントをいくつか提案しておきます。

- ①「近所づきあい」は煩わしいもの。でも、「顔見知り」「支えあい」の関係がない世界も辛い(居場所がない)と感じるなら、煩わしさも含めて「関わること」を楽しむつもりではじめよう。
- ②「仲良しであるべし」と思うと気が重い。コミュニティは「仲良し」とは違う。お互いに顔見知り、相手の考え方や物事への処し方を知っていて、協力・協働ができる関係のこと。
- ③地域コミュニティと地域組織を混同しないこと。地域コミュニティは地域のみならず構成されるゆるやかな集団。地域組織は、コミュニティをよりよく維持発展させていくための「仕組み」(大袈裟に言えば「政府」みたいなもの)。思いも立場も異なる多くの人たちからなるコミュニティでは、「みんなでする」「みんなで決める」ということは現実的には無理(「みんなで」を目指すことは大切だけど)。どの地域でも、地域組織があり地域のために頑張るリーダーたちがいることで、モノゴトが動いているということを知っておいてほしい。
- ④でも、地域組織は構成員や仕組みの限界があり、常に「コミュニティ全体を代表している」とは限らない(完璧な組織なんてない)。マイナスを数えるより、生き活きたコミュニティであるためには、地域組織をコミュニティのみんなに対して開かれたものにする努力が重要(「誰もが意見が言える」「小さなつづやきを集める」「リーダー交代の仕組みを持つ」など)。



著者プロフィール

乾 亨 (いぬい こう)

福岡市出身。設計実務に携わったかわら、住民参加の住まいづくり・まちづくりを支援。平成7年4月より立命館大学助教授。平成10年より教授。神戸市真野地区など多くの地域でゼミ生と一緒にまちづくりの支援活動に実践的に取り組んでいる。

- ⑤古くからのリーダーも若い世代も、どちらも変わらなければいけない。若い人は古いリーダーを「民主的でない」と批判し、リーダーは若い人に「理屈を言わず、やるべきことをやれ」と言う。それぞれの地域なりのやり方でリーダーたちが地域を支えてきたわけなのだから、新しい人は、まずは地域のやり方を尊重する態度が必要。その一方でリーダーたちは、若い人を積極的に誘い込み、意見に耳を傾け、活躍の場をつくる努力をしないと後がないと心得よ。
- ⑥地域活動を活発化するには、NPOや市民活動の力を借りることは効果的。理念重視の市民活動と実践重視の地域組織は肌が合わないと言われているが、市民活動のなかでも、母親たちの子育て活動や高齢者支援などの地域密着型活動は、地域組織の活動と親和性は高いはず。組織の枠や世代差が壁となり、「地域活動の人」と「市民活動の人」が誤解し合っているケースもあるが、本当はどちらも、「地域のために動いていない人」が大多数を占める地域の中で「地域のために何かしている人」という仲間。「立場が違う」と思わず「同じ想いの仲間」だとわかれば、手をつなぎやすくなるはず。

思い当たることがあれば、ちょっと変わるところから始めてみてください。

お知らせ 平成25年7月6日・7日に西南学院大学でコミュニティ政策学会福岡大会が開催されます。一般の方の参加も歓迎。詳細は同学会HP (<http://www.gakusen.ac.jp/commu/a-compol/>)参照



福岡県

きずな

No.2

平成25年3月 発行

～福岡県の地域コミュニティ情報誌～

編集・発行 福岡県企画・地域振興部市町村支援課 〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7
TEL 092(643)3072 FAX 092(643)3078

地域でふれあい、地域で支える ～ふれあい朝市～

茶屋の原団地自治区会(北九州市)

北九州市八幡西区茶屋の原。閑静な住宅街の一角に今は閉店してしまったスーパーの跡地があります。普段はひっそりとしていますが、毎週火曜日の朝になると多くの買い物客でにぎわいます。茶屋の原団地自治区会が主催する「ふれあい朝市」です。

茶屋の原団地は、約40年前に開発された住宅団地で、北九州市内でも特に高齢化が進んでいる地域です。

そこで、茶屋の原団地自治区会では、平成16年度に高齢化対策委員会を立ち上げ、さまざまな取組を行ってきました。その一つがふれあい朝市です。



多くの人々でにぎわう朝市

ふれあい朝市は、団地の中心にあったスーパーが撤退したため、自動車を運転しない高齢者の方々の買い物を支援するために始まりました。

毎回、200～300人の方々が訪れ、野菜や鮮魚、総菜などの買い物を楽しんでいます。また、会場の一角では買い物客へのお茶の提供も行っており、その名のおり地域の交流の場にもなっています。

地域ぐるみで支え合い、にぎわいを生み出している茶屋の原団地自治区会の取組を取材しました。



会場のスーパー跡地。高齢化対策委員会の看板も。

高齢者の方々の声がきっかけ

茶屋の原団地自治区会では、福祉協力員が高齢者の方々を訪問する取組などを行っていましたが、その中で見えてきたことは、なかなか外出する機会がない方が多くいるということ。

加えて、郊外の大型店舗出店の影響で団地内にあったスーパーが閉店。日常の買い物にも支障をきたすようになりました。

「高齢者の方々が外出するきっかけを作りたい。買い物に不便を感じている方々を支えたい。」このような思いから始まったのが、ふれあい朝市です。

大盛況の秘密

取材に訪れた1月22日はあいにくの雨模様でしたが、会場は販売前から長蛇の列ができる盛況ぶり。その秘密について、茶屋の原団地自治区会長の吉川三十郎さんにお話を伺いました。

まずは、値段の安さ。どの商品も一般的な価格より安く提供されています。その理由は朝市の運営方法にあります。



人気商品の鮮魚は仕入れ値程度で販売！

会場代は、跡地の所有者であるスーパーの本社の協力により無料。出店者からは運営協力金として、1区画あたり100円だけ集めているそうですが、他に費用はかかりません。その代わりに商品の価格を安くしてくれるようお願いしているそうです。

また、朝市当日には、老人会の右田会長が宣伝カーで団地内を走ります。会場の準備や片付けも地域のボ

ランティア。このように地域ぐるみで取り組むことで、毎回、盛況な朝市を実現しています。取材当日も販売開始から30分ほどでほとんどの商品が売れてしまいました。



団地を走る宣伝カー

その他にも、準備や後片付けをスムーズに行うために、自治区会でベニヤ板を利用したテーブルを製作するなど、さまざまな工夫がなされています。

「自治区会は、朝市以外の行事もあって忙しいので、なるべく時間をかけないようにしています」と吉川さん。平成21年に始まった朝市もまもなく5年目に入ります。地域の方々の協力や運営面での工夫が継続的な取組につながっているようです。

朝市を通してのふれあい

ふれあい朝市では、至る所であいさつや世間話を楽しむ光景が見られます。

「朝市のおかげで、数年間、会っていなかった人に再会したという方もいらっしゃいます。今では団地外から買い物に来る方もいて、他の地域との交流も生まれています。」と吉川さん。買い物客も運営にあたる自治区会の方々も年齢60歳代以上がほとんどですが、みなさんのいきいきとされている姿が印象的でした。朝市を通した「ふれあい」が地域の活力になっているようです。

将来美^ビジョンとコミュニケーション ～久泉区(八女郡広川町)～

八女郡広川町では、平成21年度に8つの行政区をモデル地区として、地域コミュニティ推進の取組を本格的にスタートさせました。その一つが久泉区です。区民同士のコミュニケーションを大切にしながら、さまざまな取組を行っている久泉区の活動を取材しました。

久泉区の将来美ジョン

まず、取り組んだのは計画づくり。区役員と区民20名でまちづくり委員会を設置し、区の将来像とそれを実現するための計画を「将来美ジョン」としてまとめました。

委員会には若い区民や女性も参加しています。「区の役員などは男性に偏りがちですが、若い人や女性の意見は重要なので、そういう方に特にお願いして委員会に入ってもらいました」そう語るのは、区長の綾戸信之さん。地域のさまざまな意見を反映させた将来美ジョンを区の最上位の構想・計画と位置づけ、継続的な取組につなげています。

この計画に基づき、平成22年度から3か年の重点事業として自主防災防犯事業に取り組み、防犯対策向上のための「久泉見守り隊」や区役員及び各種団体が構成される「久泉区自主防災防犯組織」が発足しました。

平成25年度からは環境保全事業として、花いっぱい運動や愛犬家のマナー向上運動に取り組むこととしています。



久泉見守り隊のみなさん

さまざまな助成も活用

久泉区では、県の補助金や宝くじの助成事業を活用した財源の確保にも努めています。平成22年度には、宝くじの助成金を活用して、水田に点在する倉庫で壁画制作を行いました。

町役場と普段からコミュニケーションをとることで、このような助成事業の情報を得るなど、活発な取組につなげているそうです。



倉庫にお絵描き♪

小さなグループ内でのコミュニケーション

「区民の協力を得るためには、日頃からのコミュニケーションが重要です。コミュニケーションを密にするには、小さなグループの方がいい。目的別に活動するグループが区内に多くあれば、活動も活発になると考えています」そう語る綾戸さん。将来美ジョンの策定を通じて、区民同士のコミュニケーションも深まり、新たなグループも生まれているそうです。

綾戸さんによると、モデル地区に応募した理由の一つが、行政区単位での取組であったこと。行政区単位であればコミュニケーションが密にとれると考えたそうです。

継続性とコミュニケーション。計画に基づく継続的な取組と、区民同士のコミュニケーションが、久泉区を支えるキーワードになっているようです。